

令和7年度 第1回 松本「シンカ」推進会議 要旨

日時：令和7年6月2日（月）

午前10時30分～

会場：松本市立博物館講堂

- 1 開会
- 2 市長あいさつ
- 3 座長選任
- 4 座長あいさつ
- 5 委員紹介
- 6 議題 ※(2)及び(3)は合わせて協議
 - (1) 第12次基本計画策定の進め方について
 - (2) 第11次基本計画の検証について
 - (3) 基礎調査結果について
 - (4) 松本「シンカ」推進会議の進め方について

(1)についての主な意見

- なし

(2)及び(3)についての主な意見

- 基礎調査結果より、松本市民の満足度は高いと出ているが、市内でも地域によって違うところがある。例えば、空き家に関する課題も街中と周辺地域とでは異なる。
- 重点戦略は、市としてこの5年で力を入れたい部分というのが、見てわかると良い。
- 基礎調査結果より、「子育てしやすいと思う者の割合が70%程度と高い」と記載があるが、これは「そう思う」と「ややそう思う」の合計となっており、詳細を見ると、「そう思う」の割合は前回調査から減少し、一方で「そう思わない」が増えている。その情報を見落とすと、全体の情報の読み取りを誤ることがあるので、調査結果は慎重に見ていく必要がある。
- 分野が縦割りだと感じる。色々な分野で課題、意見があるが、それぞれの横のつながりがない。例えば、防災という分野は、こども若者教育分野とも関連が深い。観光客へのおもてなしやDXともつながっている。基本計画の中では、横のつながりが見えづらい。分野を横断して、分野を越えて議論をしていけると良い。
- 場所の活用について、色々な人とお茶を飲みながら話ができ、他分野の人が集まれる、“隙のある場所”があると良い。スペースさえあれば可能になる。
- デジタルでできるものと、デジタルで置き換えられない価値がある。生物としての人間の交わりを考えると、デジタルの時代だからこそ、場の重要性はある。

- どうやってインクルーシブな社会をつくっていくか。障がい者が暮らしやすい地域は、すべての人にとって豊かで暮らしやすい社会といえる。インクルーシブという視点をもって計画を考えられることも大事。
- コロナ禍を経て、子どもが外に出る機会が少なくなった。盛り上がっている松本を知らないまま大人になってしまうと、郷土愛も育まれないのではないか。パルコ閉店時のイベントで「キッズパーク松本」を開催したところ、来館者数が前年の1.5倍、売り上げが1.35倍になった。子どもを中心に考えることは、経済的な視点でもポイントと捉えることができる。
- 「松本ってどういうまち？」となったとき、経済がしっかりしていなければ持続可能性が失われる。商都という松本にも焦点を当てていかなければならない。また、まちの持続可能性、バトンを渡す先は子どもたちしかいないので、その子どもたちにとって松本がどのようなまちになると良いのか。子ども時代に松本でどのような経験、想いをもって育っていくのかは、将来松本に戻ってきて何かやりたいという気持ちになる上では大切。
- “訪れる前に、住んでよし”。住んでいる人の居心地が良いことが、観光客が来ることにもつながる。すでに取組みが始まっているが、年間通して観光客数が平準化できると良い。
- 人口定常化を目指す上で、基本施策7分野の中で優先的に取り組むべきことを明確にし、予算をつけて積極的に行っていかなければならないのではないか。若者が大学進学で東京に出て、その後戻ってこないことで空き家が増える。すべての現象はリンクしている。
- 教育は学校だけが行うものなのか。街中に子どもの居場所があり、18歳になるまでに地域の大人に出会う経験が大切だと思う。学校の中だけでなく、地域の中に子どもが学べる場をつくっていくことが大切。
- 若者にとって、地域の中で“カッコいい大人”と出会うことが大切だと考えている。そのために、顔の見える関係性を築いていける場・機会があることが重要となる。
- 活動をする中で居場所が必要だと感じるが、ただ場所があるだけでは人は集まらない。そこにコーディネーター等が必要。意志・意欲のある若者や民間がそのような役割を担えるように、行政にサポートしてもらえる体制がほしい。
- 行政は施策として行っているが、市民からは「もっと取り組む必要がある」というギャップが生じている部分がある。
- 基本構想2030で掲げた5つの行動目標について、より投資を行うべきなのか、逆に転換を図るべきなのか。基本構想2030のコンセプトについての意見を聞きたい。

(4)についての主な意見

- なし